

求安錄 下の部

罪の原理

「リバイバル」にあらず、學問にあらず、慈善事業にあらず、傳道にあらず、又世の稱する忘罪術は一として功力を有するものなし、余は平安は得る能はざるものとして之を放棄せんか、我が心靈の空虚を充實すべきものは此宇宙間に存せざるか、慾あれば之に應ずる物あるは宇宙の恆則かうそくなるが如し、慾とは充實の預言ならずや、然るに我に世の充す能はざるの慾あり、人のみは満足し能はざる動物なるか、

＊ O Spirit, that dost prefer

Before all temples the upright heart and pure,

Instruct me, for thou know'st;

..... what in me is dark

Illumine; what is low, raise and support;

That to the height of this great argument

I may assert eternal Providence,

And justify the ways of God to men. ＊ — Milton.

噫聖靈よ、爾は諸ての宮殿に勝り

淨くして正しき心を受納し賜ふ、

眞理は爾に存す、願くは我を教へよ、

.....

我の暗きを輝し、我の低きを高め、

此問題の廣遠なるに憶せず、

我をして永久の攝理を講じ、

天道の是なることを辨ぜしめよ。

罪とは何ぞや、我の怒る我の竊むぬす是罪なるに相違なし、然れども何故に我は怒り我は竊むや、我は如何なれば

我が願ふ所の善は之を行はずかへつ反て願はざる所の惡は之を行ふや、惡とは苟合かうかう、汚穢おくわい、好色、巫術ふじゆつ、仇恨きういん、爭鬭、

妬忌とぎ、分怒ぶんど、分爭、結黨、異端、媚嫉びうじち、兇殺、醉酒、放蕩（ガラタエ）加拉太書五章十九、二十、二十二を謂ふか、或は所謂

肉の行なるものは心靈に存する病の徴候にして病其者にはあらざるか、我は箇々に我が肉慾と戦ふの無益なるを
知れり、然らば我が敵の本陣は何處にあるや、我わにして其病根の存する所を知るを得ば我は之を除滅するを得ん。

若し惡其物は惡行にあらずとならば善其物も善行にはあらざるべし、物を施こす必しも善にあらざるなり、名

廣めの爲めの慈善交際上の寄附金は慈善の如くにして慈善にあらず、福音を世に傳ふる必しも善にあらざるなり、

野望家の傳道師、佞奸人ねいかんの宗教家ほど憎むべきものは世に存せざるなり、善よは精神しんしんにして行ぎやうにあらず、假令たとへわれ

我がすべての所有を施し又焚るゝ爲めに我が身を豫るとも若し愛なくば我に益なし(保羅)、我救はれんが爲に何をなすべき乎の問題は決して簡易なる問題にあらざるなり。

愛國は善なり、然れども誰か愛國の美德を養成するに於て最も成功ありしものなるや、國史の研究必しも愛國者を造らず、彼の狹隘けうあいにして宇内の形勢に達せざるが故に國家百年の計はかりごとを誤まらしむるものは自國を以て中華と見做し五大洲は貢を皇國に奉らんが爲めに造られし如くに信ずる狂信家にあらずや、爵位恩給を以て繋ぐ愛國者は一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壤無窮てんじやうむきゆうの皇運を扶翼するの徒にあらざるなり、愛國者は詩人の如く天生なり、國史に通ぜざるも愛國者は愛國者なり、官祿を受けざるも愛國者は國の爲めに死するなり、國人に捨てらるゝも愛國者は國を捨てざるなり、愛國は精神にして行にあらざれば之を外部より敲たたき込むこと能はざるなり、愛國の何たるは愛國者のみ知るなり、世間ありふれの愛國者、禮拜的の愛國者、表誠ひようせい的の愛國者は博士ジョンソンの所謂愛國者にして愛國てふものゝ背後に隠るゝ奸人なり。

愛國者を造る難し、善人を造るは難の難なるものなり、巧利主義(Ultarianism)を以て養成したる善人は利益の爲めの善人にして實に頼むべからざる善人なり、純粹倫理學を以て養成したる善人は消極的の善人にして「ストイック」派の善人の如く自己を守るを知ると雖も他を利するに疎こき善人あり、古人の善行を暗記して成りたる善人は自己の特性を發達せざる鸚鵡おうわてき的の善人なり、而して眞正の善人とは己の利を求めざる人(哥林多前書十三章五節)、己が事のみを顧みず人の事をも顧みる人(腓立比書二章四節)、天より賜ひし所の賜を忽略ゆるがせにせざる人(提摩太前書四章十四節)なり、自己を害なはずして他を利し、己を潔くすると同時に公衆の幸福と社會の清淨と

を計り、古人を學ぶと同時に自己の特性を開發する理想的の善人たらんとするの道は何處にあるや。

或人きたりて基督に曰けるは、善師よ、我かぎりなき生を得んが爲には何の善事を行べきかと(馬太傳十九章十六節)、即ち完全に達せんとならば如何なる善事を行すべきかとなり、而して基督の之に對する答辨は實に彼の教義の眞意を穿ちしものなりき、基督答て曰く、

Ti me erōtas peri tou agathou; eis estin ho agathos.

何故善事に就て我に問ふや善なるものは一つのみ(即ち神なり)……「自譯」(馬太傳十九章十七節)

(註)此緊要なる一節は近來聖書學者の注意する處となり、余輩の自譯はグリースバツヒ、ラクマン、チシエンドールフ氏等の撰定に係る希臘語の本文に依るものにして日本譯の「何故われを善と稱や一人の外に善者はなし即ち神なり」とは自ら趣意を異にす(改正英譯 Why askest thou me concerning that which is good? One there is who is good. を參考せよ。)

馬可傳十章十八節竝に路加傳十八章十九節が同一の記事を載するに當て舊來の本文と同一の文字を用ゆるを見れば爰に引用せる改正本文の反つて誤謬ならんかと疑ふものもあらんかなれども、本文研究學は馬可、路加兩傳の記事を以て寫字師の思惟より出し誤訂より成りしものとなせり、殊に十六節に於ける「善師よ」

Didaskale agathe よりラクマン、チシエンドルフ、トレゲルス等の學者は「善」agatheなる形容詞を除きしを見れば改正本文の益々眞に近きを見るべし。

ユニテリヤン教が基督の神ならずして人たるを證せんとするや常に此本文に憑れり、曰く基督の明言は彼自

身を以て善なるものと稱せずして神のみを善者と教へ賜ひしを見れば基督の普通人間たりしは明瞭なりと。

然れども余輩の見る處を以てすれば假令舊來の本文にして基督の語なりとするもユニテリアン教の註解は牽けん強附會きやうふくわいの説と云はざるを得ず、基督はこゝに自己の特性を辨明しつゝあるにあらずして只一般の眞理を説

明しつゝあるなり、語勢を「われ」に置かずして「何故に」に置いて見よ、然らば此本文は基督神性論に對する一の妨害たらざるを知るべし。

何を善と云ふとの問題に對して基督は「善よとは神かみなり」と答へ賜へり、孝も善なり、仁も善なり、然れども孝も仁も善の結果にして善其物は神なり、神を知るは善人となるなり、善を學ぶは神に近づくなり、善を求めずして神を知る能はず、神を知らずして善なる能はず、宗教と道德、行と信仰とは同一物の兩面にして一を去て他を知る能はざるなり、聖書は善人を以て「神と共に歩むもの」(創世記五章廿二節)となせり、神を離れて偶像に仕ふるは善を去て惡を行ふなり、即ち惡を行ふは眞正の偶像崇拜なり、基督教徒にあれ佛教徒にあれ義を重んじ正を求むるものは神の子供にして「イスラヘル」の世嗣よごなり。

若し善とは神なりとせば惡とは勿論神を離るゝを云ふなり、竊ぬすむ、殺す姦淫するは神を離れし結果にして罪其物にあらざるなり、我れ人を殺す時に國法我を罰するは私の犯せし殺人罪其物の爲めにあらずして我が私の神を捨てしが故なり、神我と共にあり我神と共にある時は我罪を犯さんとするも犯し能はざるのみならず罪てふ念は我に存するなし、私の不完全なる、私の他人を惡口する、私の慾情の爲に使役せらるゝ、私の傲慢なる、私の人を愛せざるは、皆悉く我が神を離れし故なり、故に我にして神に歸するを得ば我は善人となり得るなり、罪よ○よ○よ○

免かるゝの法只此一途あるのみ。

斯く論究し來て余は始めて創世記に載する人類墮落に關する記事の深遠なる意味を悟るを得たり、哲學者ライブニッツ曰く

創世記に記する人類の始祖墮落の記事は人類の歴史を攻究するに當て最も著しき最も信用すべき説なりと、その口碑樣譬喩的の記事の内に人情の深奥を穿ち人性の妙所を寫すに於ては余輩讀者をして愈々之を味て愈々之を賞嘆せしむ。

墮落以前の人は實に小兒なりし、彼等に智識なく衣服なく家屋なくその外形の狀に至つては今の南洋諸島の蠻人と多く異なる處なかりしならん、然れども今日の開明の人種と雖も全く墮落以前の人類に及ばざりし一點あり、即ちアダムエバは赤子の慈母に縋るが如く神に憑り頼みしなり、然れども今の人は哲學者も政治家も宗教家も多分は自己の智識に頼て歩み、若し神を知るものと雖全く神に身を委ぬることなし。

狡猾なる蛇の誘とは人類をして神より獨立せしめ神に頼らずして歩行せしめんとなり、「善惡を知るの樹」とは實に分別の樹にして人その果を食し自らは善彼は惡と分別し得るに至らば神なくして獨り世を渡り得べしと考へたり、蛇婦に言けるは「汝等その樹の果實を食するも必ず死する事あらじ神汝等が之を食ふ日には汝等の目開け汝等神の如くなりて善惡を知に至るを知りたまふなり」と、全然たる服従は人類の好まざる所、假令神命なりと雖ども少しも我意を張らずして世渡りする事の味なさよ、我も少しく神の如くになり、我の欲する所をなし、此完美なる世界を乞我の領地となさんものと、是れ墮落を來たせし原意にして實に人類を不窮の艱苦に導

き終に死に至らしめし原因なり。

婦樹を見ば食に善く目に美麗しく且智慧からんが爲に慕はしき樹なるによりて遂に其果實を取て食ひ亦之を己と偕なる夫に與へければ彼食へり、是に於て彼等の目俱に開て彼等其裸體なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴て裳を作れり。

(創世記三章六、七節)

恰も小兒の生長するや長く嚴父の支配する所たるを惡み、獨り家産を自由にして恣に生涯を送らんものと思ひ、未だ經濟の道を知らざるに、未だ世事に詳かならざるに、夙く已に父より離れて無限の艱苦を嘗め失敗に失敗を重ねしが如し。

人類が一度神より離れしや彼等に責任の念起り來れり、自ら衣を紡ぎ面に汗して地を耕やさざるを得ざるに至れり、斯くして人類の歴史は全く新方向を取れり、彼は自ら學ばざるべからず、彼は自ら戰はざるべからず、彼は自ら責任を負はざるべからず、優は勝ち劣は破る、人は諸ての家畜諸ての獸と同じく生存競争の場裡に入れり、人類六千年間の歴史、そのソフオクリスをして我等の涙囊を絞らしめし悲戲を草せしめしも、そのセルベンチスの「ド、ンキホテ」の豪遊談をして余輩を激笑せしむると同時に無言の憂恨を胸中に起さしむるも、そのゲーテをして(Was sollen alle die Schmerz und Freude)「我に是等の悲と歡のあるは何の爲めなるぞや」の悲聲を發せしめしものも、實に實に人類が活る水の源なる神を捨て壞れたる水溜なる己に憑り頼みしに依るにあらずして何ぞや

(耶利米亞第二章十三節)

人類がその造主を離れてより彼の靈肉ともに平衡を失ひ、靈は肉を支配し得ず、肉は靈に順ひ得ず、靈の許さざる事を肉は欲し、肉の及ばざる事を靈は望み、歴史家ネアンデルの稱する人心内部の分離(Inernal Schism)之より始まり、人彼自身が修羅の街と變じたり、此に於て肉は其自然性を守るを得ず、望むべからざることを望み、爲すべからざることを爲し、數多の疾病を惹起すに至れり、苦痛のあまり彼は藥品なるものを發明して病を癒さんとすと雖も、一局部に對する藥品は他の局部に對する毒品なれば、藥劑を施は僅かに強壯なる局部を害して病弱したる局部を助くるに過ぎず、よし又醫學の進歩に由て一病症に對する特治法の發見あれば人の未だ曾て知らざる病症の起るありて人類を惱ますあり、病種の増加は醫學の進歩に伴ひ今や衛生治療の方法は著しき進歩を爲せしに關せず人類の平均生活年限は僅かに一二年を加へしのみ、曾て革命以前の佛國の哲學者等が遠からずして醫術の進歩に依り人の生涯を永遠迄維持するに至るべしと妄想せしも、尙ほ人類全軀は病の魔鬼の生贄として一秒時間に一人づゝ死刑の罰を受けつゝあるなり、軀の病のその本は心のくるひにある事を知らずして醫師に貢を絶たざる人の世に多きこそ實に歎すべきにあらずや。

自己を支配し得ざる人類がいかで鄰人の權利と自由とを害せずして止むべけむや、神を失ひてより人各々心中に空虚を生じ、自ら此空虚を充たさんとして充たす能はず、依て他人をして之を充たさしめんとし、他人の富を貪はり、他人の妻を慕ひ、他人の名譽を猜み、いかでかして心中無限の不平を満足せんと欲せり、然れども慾て餓鬼は養へば養ふ程猛烈を極め、得て益々貧しく、取て益々足らず、惡は惡を胚み、罪は罪を生み、全身亡びて后素めて他を害せざるに至る、此に至て社會は法律てふものを設け之を組織するものゝ行爲に制裁を加ふると

雖も、一方に之を防げば他方に破れ、土堤を以て漲流を堰くが如く、土堤益々高くして水層益々嵩み、年々歳々法律の數を増加し、今や社會の平安を維持せんが爲め我國に於てすら六法四千六百廿九條を要するに至れり、而して法律を實行せんが爲めには三萬の警察官と年々五百萬の警察費を要し、八千人の裁判官と一千人の代言人は之が爲めに衣食し、十萬の陸軍二萬の海軍は私の權利を侵害せられざらんが爲めに設けらる、カーライル曰く「人生の最終問題は人その鄰人の胸ぐらを掴み汝我を殺すか或は我汝を殺さんか」と言ふにありと、無限の神を以てのみ充たさるべき人靈が神ならざるものを以て充たせんとするは能はざる事なり、モンゴルの王チモールが歐亞兩大陸各半部を掠奪し、壯嚴を極めたる宮廷をサマルカンド府に開き、列國の王をして此處に朝せしむるに當て、一日歎聲を發して彼の侍臣に告げて曰く、「此世界は豫の有するが如き欲望を充たす能はず」と、時に老鍊なる顧問官某進で曰く、「陛下よ神のみが人の靈を充たし得るなり」と、チモール此言を解するを得ず、尙も進で支那帝國をも彼の領土となさんと欲し遠征の途に就くや、ヤクサルテス河邊に於て砂漠の露と消へ失せたり、匹夫より起りし大閥秀吉が日本全國を己が有となし、尙も朝鮮三道を合し、威海外に加はつて尙ほ其心情は憐むべきありて、「露とたち露と消えぬる我身なり難波のことは夢の世の中」の悲聲を以て世を去りしを見れば、神を有せざる人は巨人にして小人なり、富貴にして赤貧なり、人類の頑愚なる六千年の歴史が世の以て頼むべからざるを教ると雖も尙も兵備或は法律にのみ由て安心と満足とを得んと欲す、博士ムンゲル曰く、此勢れ果てたる世の安からざるは神を求むる無聲の叫號なりと、人類は暗夜に叫ぶ赤子の如く神よ神よと呼びつゝあるなり。

平安を外に求めて得ず、富も名譽も無限の饑渴を充たすが爲めに無効なるを知りたれば、人類は宗教なるもの

を考出し、石婦が人形を裝て母たるの情を無覺の木石に表はすが如く、心靈の父を失ひてより偶像と稱する神の人形を造り、之を拜し之を崇め以て眞正の神に呈すべき自然性を外に洩さんとす、而るに耳ありて聽かず目ありて見へざる木石像の心靈を満足し得べきにあらざれば、或は苦業と稱して身を極寒極熱にさらし、以て皇天の嘉納にあづからんとし、或は坐禪と稱して自然の感覺を殺して平安の祕訣に達せんとす、又自ら此修業に堪えざるものは頻りに之に堪ゆるものを尊崇し、宇宙の神に達し得ずとも是等の聖者に縋り付て以て神の恩澤にあづからんとす、此に於て教主政治なるもの起りて最も憎むべき最も厭ふべき壓制が世に行はるゝに至る、民の迷信は夥多の野望家を刺激し、政權を專にする能はざるものも、戰場に功を爭ひ得ざるものも、宗教界てふ柔弱社會に於ては無量の權力を有するを得るに至る、而して教法師相互の嫉妬軋轢は宗派間の競争確執となり、愛を説き慈悲を勧むる宗教家が互に相爭ふの狀は犬猿も啗ならざるあり、教會は天國に最も近くして最も遠き處なり、惡鬼已に聖殿を奪へり、人生の荒漠實に察すべきなり。

【かゝのじやう】
如 此にして人は人の敵となり、己は己の敵となり、不平不満やるかたなく、此完備せる宇宙に生れながら人類程憐れむべき動物はなきに至れり。

詩人ゲーテのメフィスト（惡魔）が神に訴へし語に曰く

月日と星の巧造に

我の批難すべきはなし

たゞはかなきは人の子が

己と己が身を攻むる

よろづの物の頭なる

人こそものすがたにて

今も昔も變りなき

驚き入たる奇物なり

天の光が彼の身に

宿りし事のなかりせば

彼の命は今よりも

堪へ易かりしものならめ

道理と稱へて道理をば

己を責むる器具となし

獸に劣る獸まで

下落するこそ憐れなれ

神の許可にて我は謂ふ

人てふものは夏の日に

草叢に棲むくさむらばつた蟲

長き後のすね足に

飛んで跳たりはねてとび

古きあだ言くりかへす

心靜かに草叢の

中に落付き居りかねて

糞の塊ある毎に

その鼻端を突入れる

或人云はん艱難と競争とは實に人類進歩の大原動力なり、若し墮落が艱苦と競争とを來らせしならば墮落は進歩の始動力ならずやと。

我之を知らず、然れども人類が流血と饑餓と無量の涙とを以て得し今日の開明進歩は彼が反逆に依て失ひし心靈の獨立と完全とを償ふに足るや、蒸氣、電信、シヤムペーン酒、クルツブ砲、水雷火船は平和、安心、愛憐、満足に勝りて善良なるものなるか、文明、文明、——文明とは歐洲の平和を保たむが爲に二百五十萬人の常備兵と、之を維持せんが爲に毎年六十億萬弗の支出を要し、虛無黨を製出し、瘋癲患者を増加し、社會を益々錯雜な

らしめ、人をして無限の慾と望の内に無限の愁苦を感じしむるものか。

競争とは實に進歩の原動力なるか、西諺に謂ゆる必要は發見の母なりとの言は必しも歴史上の事實なるか、萬物の靈たる人類は眼前の必要に逼まるにあらざれば造化の微妙を探らざるか、他人と優劣を決せんとするの野心が人類進歩の最大原動力なるか、ミルトンの「失樂園」は貧に迫りての作なるか、ルーテルの宗教改革は天主教徒の揚言するが如くドミニカ派の僧侶に對する嫉妬心より出しか、コロムブスの米大陸發見は歐洲列國競争の結果なるか、競争は或る種の進歩の始動力なりしに相違なし、甲鐵艦の如き、アームストロング砲ノルデンフェルト銃の如き、無煙火藥の如き、或は燻製卷煙草の如き香竄葡萄酒の如き、皆現然たる競争の結果と云はざるを得ず、然れども人類をして愈々高尚ならしめしもの、此地をして愈々美麗ならしめしもの、人を和合せしもの、貧を減少せしものは、競争てふ利益心に刺激されて此世に顯はれしものにあらざるなり、我に怡然たる余裕ありて素めて大思想の我より出づるなり、俗世界の名譽を博せんと欲する野望にあらずして宇宙の大眞理を探らんと欲するの聖望がコペルニカスの天躰觀察となり終に彼の大法則を生めり、黄金と象牙とを求めんとする葡萄牙國商人の冒險にあらずして黑人に天父の愛を示さんとするリビングストンの慈善心が闇黒大陸を開きコンゴ自由國の建設を促がせり、競争に依る進歩は一利あるも百害あり、一鐵道王が億萬の富を積まんが爲には彼の四人の親友は自殺し數多の家産は倒れたり、一ナポレオンが帝冠を戴き佛國が暫時の榮光に誇らんが爲めには二百萬の生靈は戰場の露と消へ億萬の寡婦と孤子は饑餓に叫べり、競争的の進歩は人類一般の損害にして利益にあらず、進歩の如く見えて退歩せり、眞正の進歩は愛憐の結果なり、歴史は然か云へり、我等の經驗も然か云へり。

嗚呼然らば我をして我と和合せしめ、我が理想とする處我之を行し、我の惡む處我之を行さざるに至らしむる道は何處にあるや、利慾に依らず、必要に逼まるに非ずして、あいぜん靄然たる貴公子の余裕を以て他を愛するの念慮より我は自己を忘るゝに至り、勝て誇らず、敗れて絶望せず、働らきつゝ休み、休みつゝ働らき、生涯を樂みつゝ之を神と國との爲に消費する我が理想的の人物と我をなさしむる道は此廣き宇宙間に存在せざるか、嗚呼我の一生は苦痛の一生にして、彼のアラビヤ物語にある、世の中せのちゆうでふ絶壁の中間に命てふ一莖いつばいの根に縋がりつき、下に死てふ大蛇が口を開きて我の落來るを待ち居れば、年とし月げつてふ鼠が細き危き命てふ莖の根元を噛みつゝあり、此危険なる境遇にたゞ妻つま子こてふ草の茂るありて恐怖の中に些少の甘味を呈すると云ふ様は永遠の希望を有する我の享うくべきものなるか、嗚呼若し人心無聲の叫號を集合し得る細音器(Microphone)ありて吾人をして其聲を聞くを得せしめば悲哀の聲は天を裂き地を動かすもなほ足らざらん、嗚呼我を救ふものあらざるか、嗚呼メシヤは未だ降らざるか、宇宙は絶望の上に立てられしか、神は存せざるか、人は捨てられしか。

「リバイバル」でもなく、学問でもなく、慈善事業でもなく、伝道でもなく、また世に言う忘罪術も、一つとして効力を持つものはない。私は平安を得られないものとしてこれをあきらめるべきだろうか。私の心（魂）の空虚を満たすものが、この宇宙間に存在しないのだろうか。欲があればそれに応じる物があるのが、宇宙の変わらない法則であるかのような。欲とは、満たされることの予言ではないか。しかし、私には世が満たすことのできない欲があるのだ。人は満たされることのできない動物なのだろうか。

ああ、聖霊よ、あなたはすべての神殿よりも、

きよく正しい心を好まれる。

真理はあなたに存在する。どうか私を教え導きたまえ。

.....

私のうちにある暗い部分を照らし、低いものを高めて支えたまえ。

そうすれば、この偉大な主題の高みに立って、

私は永遠の摂理を主張し、神の道を人々に是と証明できるだろう。——ミルトン

罪とは何だろうか。私が怒り、私が盗むのは罪に違いはない。しかし、なぜ私は怒り、私は盗むのか。なぜ私は、願っている善を行わず、かえって願わない悪を行ってしまうのか。悪とは、私欲、汚らわしさ、好色、まじ

ない、敵意、争い、ねたみ、怒り、分派、結党、異端、そねみ、殺害、醉酒、放蕩（ガラテヤ人への手紙五章十九、二十、二十一節）を言うのだろうか。あるいは、いわゆる肉の行いと言われるものは、心にある病気の徴候であり、病気そのものではないのだろうか。私は、個々に私の肉の欲望と戦うことが無益であることを知っている。では、私の敵の本陣はどこにあるのだろうか。私とその病根の存在するところを知ることができれば、それを根絶やしにできるだろう。

もし悪そのものが悪行ではないとするならば、善そのものも善行ではないはずだ。物を施すことが必ずしも善ではない。名声を得るための慈善、社交上の寄付金は、慈善のように見えて慈善ではない。福音を世に伝えることが必ずしも善ではない。野心家の伝道師、口先のうまい悪賢い宗教家ほど憎むべきものは世に存在しないのだ。善は精神であって行いではないのである。仮に私が自分のすべての財産を施し、また焼かれるためにわが身を差し出したとしても、もし愛がなければ、私には何の益もない（パウロ）。私は救われるために何をすべきかという問題は、決して単純な問題ではないのだ。

愛国は善である。しかし、誰が愛国という美德を養う上で最も成功した者だろうか。国史の研究が必ずしも愛国者を生み出すわけではない。視野が狭く世界の情勢に通じていないために、国家百年の計を誤らせてしまうのは、自国を世界の中央とみなし、五大州は皇国に貢ぎ物を献上するために造られたと信じる狂信家ではないか。爵位や恩給でつなぎとめられている愛国者は、いざという時に、国のために勇敢に奉仕し、永遠に続く皇運を助け支えるような者ではないのだ。愛国者は詩人のように生まれつきである。国史に通じていなくても愛国者は愛

国者だ。官禄を受けていなくても愛国者は国のために死ぬのだ。国人に捨てられても愛国者は国を捨てないのだ。愛国は精神であって行いではないので、それを外部から叩き込むことはできないのである。愛国がどのようなものかは愛国者のみが知っているのだ。世間によくいる愛国者、礼拝的な愛国者、表向き誠実そうな愛国者は、博士ジョンソンの言う「愛国者というものの背後に隠れている悪人」である。

愛国者を造るのは難しいが、善人を造るのは難中の難である。功利主義(Utilitarianism)で養成された善人は、利益のための善人であって、実のところ頼りにならない善人である。純粹倫理学で養成された善人は、消極的な善人であって、「ストア派」の善人のように自己を守ることが知っていても、他者を利することには疎い善人である。古人の善行を暗記してできた善人は、自己の特性を発達させないオウム的な善人である。そして、真正の善人とは、自分の利を求めない人(コリント人への手紙第一 十三章五節)、自分のことだけを顧みず人のことも顧みる人(ピリピ人への手紙二章四節)、天から与えられた賜物をなおざりにしない人(テモテへの手紙第一 十四章十四節)である。自己を害さずに他者を利し、自らを清くすると同時に公衆の幸福と社会の清らかさを図り、古人を学ぶと同時に自己の特性を開発する理想的な善人となるための道はどこにあるのだろうか。

ある人が来てキリストに言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか」(マタイの福音書十九章十六節)。すなわち、完全に達するためには、どのような善いことを行えばよいのかということである。そして、キリストのこれに対する答弁は、まさに彼の教えの真意を深く言い当てたものであった。キリストは答えて言う。

Ti me erōtas peri tou agathou; eis estin ho agathos.

なぜ善いことについて私に尋ねるのか。善なるものは一つのみ（すなわち神である）

……「自訳」（マタイの福音書十九章十七節）

（注）この重要な一節は、近頃聖書学者の注目するところとなり、私たちの自訳は、グリースバッハ、ラクマン、チシENDORF氏らが選定したギリシア語の本文に基づくものであり、日本訳の「何故われを善と称（よぶ）や一人の外に善者はなし即ち神なり」とは自ずと趣旨を異にする（改訂英訳の "Why askest thou me concerning that which is good? One there is who is good." を参考にせよ）。

マルコの福音書十章十八節およびルカの福音書十八章十九節が同一の記事を載せるにあたって、旧来の本文と同じ文字を用いているのを見れば、ここに引用した改正本文がかえって誤りではないかと疑う者もいるかもしれないが、本文研究学は、マルコ、ルカ両伝の記事を、写字生の思い違いから生じた誤った訂正によるものとしている。特に十六節における「善師よ」（Didaskale agathe）から、ラクマン、チシENDORF、トレゲルスらの学者が「善」（agathe）という形容詞を削除したのを見れば、改正本文がますます真実に近いことがわかる。

ユニテリアン教がキリストは神ではなく人であることを証明しようとするとき、常にこの本文に頼った。曰く、キリストの明言は、彼自身を善なるものと称さず、神のみを善者と教えているのを見れば、キリストが普通の人間であったことは明白であると。

しかし、私たちの見解からすれば、仮に旧来の本文がキリストの言葉であるとしても、ユニテリアン教の注釈は牽強附会(道理に合わないことを、自分の都合の良いように無理にこじつけること)の説と言わざるを得ない。キリストはここで自己の特性を弁明しているのではなく、ただ一般の真理を説明しているだけなのだ。

語勢を「私」に置かず、「なぜ」に置いてみれば、この本文がキリスト神性論に対する妨害とならないことがわかるだろう。

「何を善と言うのか」という問題に対して、キリストは「善とは神である」と答えた。親孝行も善であり、仁も善である。しかし、親孝行も仁も善の結果であって、善そのものは神なのだ。神を知るのは善人となることであり、善を学ぶのは神に近づくことである。善を求めずして神を知ることができず、神を知らずして善人となることはできない。宗教と道徳、行いと信仰とは、同一物の両面であって、一方を失って他方を知ることができないのだ。聖書は善人を「神と共に歩むもの」(創世記五章二十二節)としている。神を離れて偶像に仕えるのは、善を去って悪を行うことである。すなわち、悪を行うのは真の偶像崇拜である。キリスト教徒であれ仏教徒であれ、義を重んじ正しさを求める者は、神の子どもであって、「イスラエル」の世継ぎである。

もし善とは神であるとすれば、悪とはもちろん神を離れることを言うのだ。盗む、殺す、姦淫するなどは、神から離れた結果であって、罪そのものではないのだ。私が人を殺すとき、国法が私を罰するのは、私が犯した殺人罪そのもののためではなく、私が私の神を捨てたからだ。神が私と共にあり、私が神と共にいるときは、私は罪を犯そうとしても犯すことができないばかりか、罪という念は私に存在しないのだ。私の不完全さ、私の他人

を悪く言うこと、私の欲望に支配されること、私の傲慢さ、私の人を愛さないことは、すべて私が神を離れたからだ。ですから、私が神に立ち返ることができれば、私は善人となり得るのだ。罪から免れる道はただこの一途しかないのである。

このように論究してきて、私は初めて創世記に載っている人類墮落に関する記事の深遠な意味を悟ることができた。哲学者ライプニッツは言う。

創世記に記されている人類の始祖墮落の記事は、人類の歴史を考察するにあたつて最も際立つており、最も信用すべき説である。

とその碑文のような比喩的な記事の内部に、人情の奥深さを深く捉え、人性の妙所を描写するにおいては、私たち読者をますます味わわせ、ますます賞賛させるのだ。

墮落以前の人は、実のところ幼児であつた。彼らには知識がなく、衣服がなく、家屋もなく、その外見の様子に至つては、今の南洋諸島の未開人と大して変わるところはなかつただろう。けれども、今日の開明な人種であっても、全く墮落以前の人類に及ばなかつた一点がある。すなわち、アダムとエバは、赤子が慈母にすぎるように神に頼つたのだ。しかし、今の人は哲学者も政治家も宗教家も、たいていは自己の知識に頼つて歩み、もし神を知る者がいたとしても、完全に神に身を委ねることはない。

狡猾な蛇の誘ひとは、人類を神から独立させ、神に頼らずに歩ませようとするものであつた。「善悪を知るの樹」

とは、まさに分別の樹であって、人がその実を食べて自らこれは善、あれは悪と分別できるようになれば、神なくして一人で世を渡っていけると考えたのだ。蛇は女に言った。「あなたがたはその樹の果実を食べても、決して死ぬことはない。神は、あなたがたがそれを食べる日には、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになって善悪を知ることを知っているのだ」(創世記三章四、五節)。全くの服従は人類の好まないところである。たとえ神の命令であっても、少しも自分の考えを主張せずに世を渡っていくことの味気なさよ。「私も少しく神のようになり、私の欲するところをなし、この完璧な世界を乞食の私の領地としたいものだ」と。これこそが墮落を招いた元の意図であって、実のところ人類を限りない艱苦に導き、ついに死に至らせた原因なのである。

そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、またその木は賢くしてくれそうで好ましかった。それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた。こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

(創世記三章六、七節)

あたかも幼い子どもが成長するにつれて、長く厳格な父親の支配下にあることを嫌い、一人で家産を自由にしたいと思うままに生涯を送りたいと思ひ、まだ経済の道を知らず、まだ世事に詳しくないうちに、早くも父から離れて、無限の艱苦をなめ、失敗に失敗を重ねたかのようにだ。

人類が一度神から離れたとき、彼らに責任の念が起き始めた。自ら衣を紡ぎ、額に汗して地を耕さざるを得ないようになった。こうして人類の歴史は全く新しい方向を取った。彼は自ら学ばざるを得ず、彼は自ら戦わざる

を得ず、彼は自ら責任を負わざるを得ない。優者は勝ち、劣者は敗れる。人はすべての家畜、すべての獣と同じく生存競争の場に入れられたのだ。

人類六千年の歴史、そのソボクレスに私たちの涙腺を絞らせる悲劇を書かせたのも、そのセルバンテスの『ドン・キホーテ』の豪放な冒険談に私たちを大笑いさせると同時に言葉にできない憂いを胸中に起こさせるのも、そのゲーテに「なぜ私にはこれほどの悲しみと喜びがあるのだろう」(Was sollen alle die Schmerz und Freude!)という悲痛な叫びを発せしめたのも、実に実に人類が「活ける水の源」である神を捨て、「壊れた水溜め」である自分に頼ったことによるのではなくて何だろうか(エレミヤ書二章一三節)。

人類がその創造主を離れてから、彼の霊と肉はともに平衡を失い、霊は肉を支配できず、肉は霊に従うことができない。霊の許さないことを肉は欲し、肉の及ばないことを霊は望み、歴史家ネアンダーの言う「人心内部の分離」(Internal Schism)がこれより始まり、人は彼自身が修羅の巷と化してしまった。この状態では、肉はその自然性を守ることができず、望むべからざることを望み、為すべからざることを為し、数多くの疾病を引き起こすに至った。苦痛のあまり、彼は薬品なるものを発明して病気を治そうとするが、ある局所に対する薬品は、他の局所に対する毒品であるため、薬を施すことはわずかに強壮な局所を害して病弱化した局所を助けるに過ぎない。よしんばまた医学の進歩によってある病状に対する特效薬が発見されても、人のまだかつて知らなかった病状が起こることがあり、人類を苦しめることがある。病気の種類の増加は医学の進歩に伴い、今や衛生治療の方法は著しい進歩を遂げているにも関わらず、人類の平均生活年限はわずかに一、二年を加えたのみである。かつ

て革命以前のフランスの哲学者らが、遠からずして医術の進歩により人の生涯を永遠まで維持するに至るだろうと妄想したが、なお人類全体は病気の魔鬼の生贄として、一秒間に一人ずつ死刑の罰を受け続けているのだ。体の病気のその根本が心の狂いにあることを知らずに、医師に貢ぎ物を絶たない人が世に多いことは、実に嘆くべきではないか。

自己を支配できない人類が、どうして隣人の権利と自由を害せずに行われるだろうか。神を失ってから、人はめいめい心中に空虚を生じ、自らこの空虚を満たそうとしても満たすことができず、それゆえ他人にこれを満たさせようとし、他人の富をむさぼり、他人の妻を慕い、他人の名誉をねたみ、何とかして心中にある無限の不満を満足させたいと欲した。しかし、欲という魔鬼は、養えば養うほど猛烈を極め、得てますます貧しく、取つてますます足りず、悪は悪をはらみ、罪は罪を生み、全身が減びてのち初めて他を害しなくなるに至る。この事態に至って、社会は法律というものを設け、これを組織する者の行為に制裁を加えるが、一方でこれを防げば他方で破れ、土手をもつて増水した流れをせき止めるように、土手はますます高くなり、水位はますます増し、年々歳々法律の数を増加し、今や社会の平安を維持するため、わが国においてすら六法四千六百二十九条を必要とするに至っている。そして、法律を実行するためには、三万人の警察官と年々五百万の警察費を要し、八千人の裁判官と一千人の弁護士がそのために衣食し、十万の陸軍二万の海軍は私たちの権利が侵害されないようにするために設けられる。カーライルは言う。「人生の最終問題は、人がその隣人の胸ぐらを掴み、『お前は私を殺すのか、それとも私がお前を殺そうか』と言うことにある」と。無限の神によってのみ満たされるべき人の魂が、神では

ないものによって満たされようとするのは不可能なことである。モンゴルの王チムールがヨーロッパとアジア両大陸の各半分を略奪し、壮麗を極めた宮廷をサマルカンド府に開き、列国の王にここに入朝させたとき、ある日嘆息を発して彼の侍臣に告げて言った、「この世界は、予の持つような欲望を満たすことができない」と。その時、老練な顧問官が進み出て言った、「陛下よ、神のみが人の魂を満たし得るのです」と。チムールはこの言葉を理解することができず、なおも進んで支那帝国をも彼の領土としようと欲し、遠征の途に就くや、ヤクサルテス河畔において砂漠の露と消え失せた。一介の平民から身を起こした太閤秀吉が日本全国を己が有とし、なお朝鮮三道を合わせ、威勢が海外に加わったにも関わらず、なおその心境は哀れむべきものがあり、「露とたち露と消えぬ我が身なり 難波のことは夢の世の中」という悲痛な声をもって世を去ったのを見れば、神を持たない人は巨人にして小人であり、富貴にして極貧である。人類の頑なな六千年の歴史が、世間が頼りにならないことを教えているにも関わらず、なおも兵備あるいは法律にのみよって安心と満足とを得ようと欲する。博士ムンゲルは言う、「この疲れ果てた世が安らかでないのは、神を求める無言の叫びである」と。人類は暗い夜に叫ぶ赤子のように神よ神よと呼びつつあるのだ。

平安を外に求めても得られず、富も名誉も無限の飢えと渴きを満たすためには無効であることを知ったので、人類は宗教というものを考え出し、石でできた母馬が人形を着飾らせて母の情を感覚のない木や石に表すように、心の父を失ってから、偶像と称する神の人形を造り、これを拝み、これを崇めて、真の神に捧げるべき自然性を外に漏らそうとする。しかし、耳があっても聞かず、目があっても見えない木や石の像が心を満足させ得るわけ

がないので、ある者は苦行と称して身を極寒極熱にさらし、皇天の嘉納にあずかろうとし、ある者は坐禅と称して自然の感覚を殺して平安の秘訣に達しようとする。また、自らこの修行に耐えられない者は、しきりにこれに耐える者を尊崇し、宇宙の神に達せずとも、これらの聖者にすがりついて神の恵みにあずかろうとする。この結果、教主政治というものが起り、最も憎むべき、最も嫌うべき圧制が世に行われるに至る。民衆の迷信は多くの野心家を刺激し、政権を専らにできない者も、戦場で功績を争い得ない者も、宗教界という柔弱な社会においては限らない権力を持つことができるようになっていく。そして、教法師の相互の嫉妬と軋轢は宗派間の競争と確執となり、愛を説き慈悲を勧める宗教家が互いに争う様子は、犬猿もただならないほどである。教会は天国に最も近くして最も遠い場所であり、悪鬼がすでに聖殿を奪っている。人生の荒涼は実に察するべきである。

このようにして、人は人の敵となり、己は己の敵となり、不平不満はやり場がなく、この完備した宇宙に生まれながら、人類ほど哀れむべき動物はいないという事態に至った。

詩人ゲーテのメフィストフェレス（悪魔）が神に訴えた言葉に言う。

月と星の巧みな創造について、私が非難すべきことはない。

ただはかないのは人の子が、自分自身と自分の身を攻めることだ。

万物の頭である人こそ、元の姿のままで、

今も昔も変わらない、驚き入るべき奇妙な物だ。

天の光が彼の身に宿るということがなかったならば、

彼の命は今よりも耐え易いものだっただろう。

道理と称して道理を、自分を責める道具となし、

獣に劣る獣にまで墮落することこそ哀れだ。

神の許可を得て私は言う、人というものは夏の日に

草むらに棲むバッタのように、長い後のすね足で、

飛んで跳ねたり、跳ねて飛んだりし、古い悪口を繰り返す。

心静かに草むらの中に落ち着いていられず、

糞の塊があるたびに、その鼻先を突っ込む。

ある人は言うだろう、「艱難と競争とは、実に人類進歩の大きな原動力である。もし墮落が艱苦と競争とを引き起こしたのなら、墮落は進歩の始まりの力ではないか」と。

私はそれを知らない。けれども、人類が流血と飢餓と限りない涙をもつて得た今日の開明と進歩は、彼が反逆によって失った心の独立と完全とを償うに足るだろうか。蒸気、電信、シャンパン、クルップ砲、水雷、火船は、平和、安心、愛憐、満足に勝って善良なものなのだろうか。文明、文明、——文明とは、ヨーロッパの平和を保つために二百五十万人の常備兵と、これを維持するために毎年六十億万ドルの支出を要し、虚無党を作り出し、精神病患者を増加させ、社会をますます複雑にし、人に無限の欲と望みの内に無限の愁苦を感じさせるものなのだろうか。

競争とは実は進歩の原動力なのだろうか。西洋の諺に言う「必要は発明の母なり」という言葉は、必ずしも歴史上の事実なのだろうか。万物の霊長である人類は、眼前の必要に迫られるのでなければ、造化の微妙を探索しないのだろうか。他人と優劣を決めようとする野心が、人類進歩の最大の原動力なのだろうか。ミルトンの『失樂園』は貧困に迫られての作なのだろうか。ルターの宗教改革は、カトリック教徒が公言するように、ドミニコ派の僧侶に対する嫉妬心から出たのだろうか。コロンブスのアメリカ大陸発見はヨーロッパ列国競争の結果なのだろうか。競争はある種の進歩の始まりの力であったことに違いはない。甲鉄艦のようなもの、アームストロング砲やノルデンフェルト銃のようなもの、無煙火薬のようなもの、あるいは燻製巻煙草のようなもの、香りの強い葡萄酒のようなものは、みな紛れもない競争の結果と言わざるを得ない。けれども、人類をますます高尚ならしめ、この地をますます美しくならしめ、人を和合させ、貧困を減少させたものは、競争という利益心に刺激されてこの世に現れたものではないのだ。私に和やかな余裕があつて初めて大きな思想が私から生まれるのだ。俗世間の名誉を得ようとする野心ではなく、宇宙の大真理を探索しようとする聖なる望みがコペルニクスの天体観察となり、ついに彼の大きな法則を生み出した。黄金と象牙を求めようとするポルトガル国の商人の冒険ではなく、黒人に天の父の愛を示そうとするリビングストンの慈善心が暗黒大陸を開き、コンゴ自由国の建設を促した。競争による進歩は一利あつても百害がある。ある鉄道王が億万の富を築こうとするためには、彼の四人の親友は自殺し、数多くの家産は倒れた。一人のナポレオンが帝冠を戴き、フランスが一時的な栄光を誇ろうとするためには、二百万の生霊が戦場の露と消え、億万の寡婦と孤児は飢餓に叫んだ。競争的な進歩は人類一般の損害であ

って利益ではない。進歩のように見えて、退歩しているのだ。真の進歩は愛憐の結果である。歴史はそう言っている。私たちの経験もそう言っている。

ああ、それでは、私を私と和合せ、私の理想とするところを私が実行し、私の憎むところを私が実行しないに至らせる道はどこにあるのだろうか。利欲によらず、必要に迫られるのでもなく、静かで穏やかな貴公子の余裕をもって他を愛する念慮から、私は自己を忘れるに至り、勝って誇らず、敗れて絶望せず、働きつつ休み、休みつつ働き、生涯を楽しみつつこれを神と国とのために消費する私の理想的な人物と私をならしめる道は、この広い宇宙間に存在しないのだろうか。ああ、私の一生は苦痛の一生であって、あのアラビア物語にある、世の中という絶壁の中間で命という一本の根にすがりつき、下には死という大蛇が口を開いて私が落ちてくるのを待ち、年月という鼠が細く危うい命という茎の根元をかみ続けている、この危険な境遇にただ妻子という草が生い茂ることがあって、恐怖の中にわずかな甘味を呈するというありさまは、永遠の希望を持つ私が享受すべきものなのだろうか。ああ、もし人心の無言の叫びを集めることができるマイクロホンがあって、私たちにその声を聞くことができるのであれば、悲哀の声は天を裂き地を動かすもお足りないだろう。ああ、私を救うものはいないのだろうか。ああ、救世主（メシヤ）はまだ降臨しないのだろうか。宇宙は絶望の上に立てられたのだろうか。神は存在しないのだろうか。人は捨てられたのだろうか。